

宮本武蔵(三)



吉川英治全集

第19卷

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作権者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・19 宮本武蔵(三)

著 者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式講談社

東京都文京区音羽二丁目二番二
電話東京九四二局二二二二(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特漉

第一刷 昭和四十三年十一月二十日 第三刷 昭和四十四年一月三十日

定価 六百八十円

© 一九六八年 吉川文子

目次

空の巻(つづき)

三

二天の巻

八

円明の巻

二四

宮
本
武
藏
(三)

空
の
巻
(つづき)

入城府

一

両国という地名も橋が出来てから後の事である。まだ両国橋も、その頃は無かった。

けれど、下総領から来る道も、奥州街道から岐れて来る道も、後の橋の架けられた辺りへ来て、大川に突き当たっていた。

渡し場には、関門と呼んでよい位な、厳しい木戸があった。

そこには、江戸町奉行の職制ができてから、初めての初代町奉行、青山常陸介忠成の手の者が、

『待て』

『よろしい』

などと、いちいち通行人検めをしていた。

(ははあ、だいぶ江戸の神経も、尖っておるな)
と、武蔵はすぐ思った。

三年前、中山道から江戸へ足を入れて、すぐ奥羽の旅へ向った時、まだ、この都市の出入はさほどでなかった。

それが、急激にこう嚴重になったのはなぜか？

武蔵は、伊織を連れて、木戸口に順々に並んでいる間に考えた。

都市が都市らしくなると必然に、人間が殖える、人間の中の種々な善業悪業が相剋し合う。制度が要る、制度の法網を潜る方も活潑になる。そして榮えを祈る文化を打ち建てながら、その文化の下で、もう浅ましい生活や慾望が血みどろで地上に嘔み合う。

それもある。

が又、ここが徳川家の將軍所在地となると共に、大坂方に対する警戒も、日に増して嚴密を要するのであらう。——何しろ大川を隔てて見ても、この前、武蔵が見た江戸とは、家々の屋根が殖えている事や、緑が目立って減っている事だけでも、隔世の感があった。

『御牢人は——？』

そう呼ばれた時は、もう草袴を穿いた二人の木戸役人に、武蔵は、懷中から背や腰の——体じゅうを撫でまわされていた。

べつな役人が、側から厳しい目で詰問した。

『御府内へ、何用を帯びて行かっしゃるか』

武蔵はすぐ答えた。

『何処とて、的もなく歩く修行者でござる』

『的もなく？』

と、咎め立てして、

『修行するというのがあてではないか』

『……………』

苦笑を見せると、

『生国は?』

と、たたみかける。

『美作吉野郷宮本村』

『主人は』

『持ちませぬ』

『然らば、路用その他の出費は、誰から受けておられるか』

『行く所で、いささか余技の彫刻をなし、画などを書き、又寺院に泊り、乞う者があれば太刀技もおしえ、人々の合力に依つて旅しておりますが……それもない時には、石にも臥し、草の根や木の実を喰らうております』

『ふム……で、いずれからお越しなされた』

『陸奥に半年あまり、下総の法典ヶ原に、百姓の真似事して、二年程を過ごし、いつ迄、土いじりもと存じて、これ迄、参つてござります』

『連れの童は』

『同所で拾い上げた孤児——伊織と申し、十四歳に相成ります』

『江戸で泊る先はあるのか。無宿の者、縁故のない者は、一切入れぬが』

限りが無い。後にはもうたくさん往来人がつかえている。

素直に答えているのも莫迦らしく、ひとにも迷惑と考えて、武蔵は答えた。

『あります』

『何処の、誰か?』

『柳生但馬守宗矩との』

二

『何、柳生どのへ』

役人は、ちょっと、鼻白んで黙った。

武蔵は、おかしく思った。柳生家とは、われながら、いみじくも思い付いたものだと思つて感心する。

かねて大和の柳生石舟斎とは、面識はないが、沢庵を通じて相知る仲である。問い合せられても、

(そんな人間は知らぬ)

とは柳生家でも答えまい。

ひょっとしたら、その沢庵も江戸表へ来ているような気がする。石舟斎には、遂に、面識も遂げず宿望の一太刀も合せなかつたが、その嫡子で——且つ柳生流の直流を享け、秀忠將軍の指南に就任して来ている但馬守宗矩には、ぜひ共、会いもしたいし、試合も受けてみたい。

そう、日頃から思っていたのが——思わず直ぐ行く先かのようになり、木戸役人の質問に出してしまったのである。

『いや、それでは、柳生家に御縁故のあるお方で御座ったか。』

……失礼いたしました。何分、うろんな侍共が、御府内に入り込む為、牢人方と見れば、一際、厳密な取調べを要す——という上司からの厳達なので』

役人は、こう言葉も態度もあらためて、後の調べは、ほんの形式だけですまし、

『お通りなさい』

と、木戸口から送った。

伊織は後から尾いて来て、

『先生、なぜ待だけ、あんなにやかましいんだろ』

『敵方の間者に備えてであらうな』

『だって、問者なら、牢人のふうなんかして、通るもんか。お役人って、頭がわるいね』

『聞えるぞ』

『たった今、渡船が落ちまったよ』

『待つ間に富士でも眺めておれというのだろう。——伊織、富士が見えるぞ』

『富士なんて、めずらしくないや。法典ヶ原からだって、いつも見えるじゃないか』

『ぎょうの富士はちがう』

『どうして』

『富士は、一日でも、同じ姿であつた事がない』

『同じだよ』

『時と、天候と、見る場所と、春や秋と。——それと観る者のその折々の心次第で』

『……………』

伊織は、河原の石を拾って、水面を切って遊んでいたが、

ひょいと跳んで来て、

『先生、これから、柳生様のお屋敷へ行くんですか』

『さあ、どうするか』

『だって、あそこで、そういったじゃないか』

『一度は、行くつもりだが……………先様は、大名だからの』

『將軍家の御指南役って、偉いんだらうね』

『うむ』

『おらも大きくなったら、柳生様のようにならう』

『そんな小さい望みを持つんじゃない』

『え……………なぜ？』

『富士山をごらん』

『富士山にやれないよ』

『あれにならう、これに成らうと焦心より、富士のように、黙って、自分を動かさないものに作りあげろ。世間へ媚びずに、世間から仰がれるようになれば、自然と自分の値うちは世の人が極めてくれる』

『渡船が来たよ』

子供は、人に遅れるのが嫌いだ。伊織は、武蔵をさえ捨てて、真っ先に乗合の舳へ跳び移った。

三

広い所もあれば、狭い所もある。河の中には洲もあるし、流れの早い瀬も見える。何しろ当時のすみだ川は、自由気儘な姿であつた。そして両国はもう海に近い入江であり、波の高い日は、濁流が両河岸を浸して、平常の二倍にも見える大河になつた。

渡船の棹は、ガリガリと、川底の砂利を突いてゆく。

空の澄んだ日は、水も澄み切って、舳から魚の影が覗かれた。赤く錆びた兜の鉢金などが、小石の間に埋っているのもまた見えた。

『どうだろう、このまま天下泰平に治まるものだろうか』

渡船の中の話である。

『そうは行くめえなあ』

と、ひとりがいふ。

その連れが、連れの者の言葉に裏書して、

『いずれ、大戦さ。——無ければそれに越したことはねえが』

話は、弾みかけて弾まなかった。中には、止せばいいにとい

う顔して水を見ている者もある。役人の耳が怖いからだった。

だが、お上の怖い目や耳を掠めながら、民衆はそういう物へ触れるのを好む。わけもなくただ好むのである。

『その証拠には、ここの渡船の木戸調べでもそうだ。こう往来検めが厳しくなったのは、つい近頃のこつたが、それというのも、上方からどしどし隠密が入り込んでゐるからだといふ噂だぜ』

『そういえば、この頃、大名屋敷へよく這入る盗賊があるそう

だ。——外聞に洩れては、見ともないので、這入られた大名は皆、口を拭いてゐるらしいが』

『それも、隠密だろうぜ、いくら金の欲しい奴でも、大名屋敷

などは、生命を捨ててからなければ這入れねえ所だ。ただの泥棒である筈はねえ』

渡船の客を見渡すと、これは江戸の一縮図といつていい。鋸屑を着けてゐる材木屋、上方流れの安芸人、肩胛を突ッ張つて

ゐる無法者、井戸掘らしい一かたまりの労働者、それとふざけ

ている売笑婦、僧侶、虚無僧——そして武蔵のような牢人者。船が着くと、それ等の人々がぞろぞろと、流れになって、岸

へ上つて行く。

『もし、御牢人』

武蔵を追いかけて来た男があった。見ると、船の中にいた背のずんぐりした無法者で——。

『お忘れ物をなすつたろう。こいつあ、おめえさんの膝ッ子から落ちたんで、拾つて来たが』

と、赤地錦の——といつても余りに古びて金襴の光りより

は、垢光りの方がよいにする巾着の耳を掴んで、武蔵の顔の前へ出した。

武蔵は、顔を振つて、

『いや、てまえの所持品ではありませぬ。誰ぞ、ほかの乗合の衆の物でござろう』

いうと、その横合から、

『ア、おらのだ』

と、無法者の手から、いきなりそれを奪つて、懷中へ仕舞つた者がある。

武蔵の側にいると、あまり背の違いがあるので、よく見ないと気がつかないほど小さい、伊織であつた。

無法者は、怒つた。

『やいやい、いくら汝の物だつて礼もいわずに、引ッ奪くるといふ奴があるか。もいちど、今の巾着を出せ。改めて三べん廻つてお辞儀をしたら返えしてやるが、さもなければ、河ン中へ、叩ッ込んでしまふから』

四

無法者の怒り様も大人げなく思われたが、伊織の仕方も重々よくない。——だが子供の事であるから自分に免じて寛してくれ、と武蔵が代つて詫ると、無法者は、

『兄か、主人か、何か知らねえが、じゃあおめえの名を聞いておこう』

と、いう。

武蔵は、辞を低く、

『名乗るほどの者ではありませんが、牢人宮本武蔵という者です』

すると、無法者は、

『えっ？』

と、目をみはって、暫く凝視していたが、

『これから気をつけろ』

伊織へ一言、捨て科白を置いて、さっと身を翻すように立ち去ろうとした。

『待てっ』

処女のように柔和だった者の口から、こう不意に一喝くつて、無法者はびくとしながら、

『な、なにしがんでい』

掴まれている脇差のこじりを挽ぎ払おうとして振向いた。

『汝の名を申せ』

『おれの名』

『ひとの名を聞いたまま、会釈もなく立ち去る法があるのか』

『おらあ、半瓦の身内のもんで、菰の十郎ってんだ』

『よし、行け』

突っ放すと、

『覚えてやがれ』

と、菰はのめったまま素っ飛んで行った。

伊織は、自分のかたきを打って貰ったように、

『いい気味だ、弱虫』

又とない頼母しい人のように武蔵を見上げて、その側へくっ

ついた。

町へと、歩き出しながら、

『伊織』

『はい』

『今までのように、野原に住んで、栗鼠や狐が隣り近所のうちはよいが、このように多くの人の住んでいる町中へ来たら、礼儀作法を持たねばならぬぞ』

『はい』

『人と人が円満に住んでゆければ地上は極楽だが、人間は生れながら神の性と、悪魔の性と、誰でも二つ持っている。それが、ひとつ間違うと、この世を地獄にもする。そこで、悪い性質は働かせないように、人中ほど、礼儀を重んじ、体面を尊び、又、お上は法を設けて、そこに秩序というものが立ってくる。――おまえが先刻したような不作法は小さい事だが、そういう秩序の中では人を怒らせるのだ』

『はい』

『これから、何処へどう旅して行くか知れぬが、行く先々の掟には素直に、人には礼儀をもって対うのだぞ』

囁んで含めるようにいい聞かせると、伊織は、何遍もこっくりして、

『分りました』

と、早速に言葉もていねいになったり、取って付けたようなお辞儀もしてから、

『先生、又落すといけませんから、これを、済みませんが、先生のふところに持っていて下さい』

と、さつき渡船の中へ忘れてしまう所だった襦袢の巾着を、

武蔵の手に預けた。

それ迄は、かくべつ氣にも止めなかった武蔵は今、手にしてふと思ひ出した。

『これはお前が父から遺物にもうた品ではないのか』

『ええそうです。徳願寺へ預けておいたら、今年になって、お住持さんが、黙って返してくれた。おかねも元のまま這入っているよ。なにか要る時には、そのおかね、先生が費してもかまわないよ』

五

『ありがとう』

武蔵は、伊織へそういった。

他愛もない言葉ながら、伊織の氣持は欣しいものだった。彼は自分の侍っている先生が、いかに貧しいかを、子供ごろにも常に案じているふうなのだ。

『では、借りておくぞ』

おしいだいて、武蔵は、彼の巾着を懷中に預かった。

そして歩きながら思うには、伊織はまだ子供だが、幼少から、あの瘦せた土と藁の中に生れ、審きに生活の困窮を舐めてきたので、童心の中にも自から「経済」というものの觀念が、つよく養われている。

それに較べると、武蔵は自分ながら、自分には「かね」を輕視し、経済を度外視している欠点があることに気づく。

大きな経策には関心をもつのであるが、自己の小さい経済には、ほとんど無関心なのである。そして幼い伊織にさえその「私の経済」には、いつも心配を煩わしている。

(この少年は、自分には無い才能を持っているようだ)

武蔵は、馴じむ程、伊織の性格の中に、次第に磨かれてくる聰明をたのしく思った。それは彼自身にも亦、別れた城太郎にもないものだと思つた。

『どこへ泊ろうな、今夜は』

武蔵には、的がない。

伊織は、めずらしげに、町ばかり見廻していたが、やがて異郷の中に、自分の友達でも見つけたように、

『先生、馬がたくさんいるよ。町の中にも馬市が立つんだね』

と輕い昂奮をして指さす。

博労が集まつて、博労茶屋や博労宿が無秩序に殖えだしたので、近頃「ばくろ町」と呼ばれている辻の辺から——馬の背が無数に並んでいる。

市へ近づくと、馬と人間がわんわんいつている。関東訛りの、あらゆる地方語で喚いているので、なんの意味やら分らない騒音になっている。

従者をつれた武家の者が、頻りと名馬を探し求めている。

世間に人材が乏しいように、馬の中にも、名馬が少ないものとみえ、その侍は、

『もう帰ろうわえ、一匹も殿へお薦めできるような馬は居りやせん』

こういい放つて、馬の間から大股に身を反らした時、はたと、武蔵と正面に出會った。

『おう』

と、その侍は、胸を反らし、

『宮本氏ではないか』

武蔵もその顔を見つめて、同じように、

『おう』

と、顔を綻はなばせた。

それは大和の柳生ノ庄で、親しく新陰堂へ招かれたこともあるし、一夜を剣談に更かしたこともある——柳生石舟斎の高足木村助九郎であった。

『いつから江戸表へ御座ったな。意外な所で、お目にかかったのう』

と、助九郎は、武蔵のすがたを見て、武蔵が今猶、修行の途にまみれている様子を見て取ったようにいった。

『いや、たった今、下総しもさ領から来たばかりです。大和の大先生にも、その後、お健やかで居られますか』

『御無事でござる。したが、もう何分、御高齢でな』

と、いつて、すぐ、

『いちど但馬守様のおやしきにも、お越しがあるとよい。お紹ひょう介けわせもしようし……それに』

と助九郎は、何の意味か、武蔵の面おもてを見つめながら、にっと笑った。

『貴公の美しい落し物が、お邸へ届いておるぞ。ぜひ一度、訪ねて御座らっしゃい』

——美しい落し物。

はて？ 何だろう。助九郎は仲間ともだちを連れてもう往来の向う側へ、大股に移っていた。

蠅はえ

一

ここは裏町——つい今し方、武蔵の彷徨さまよっていた博労町はくろうまちの裏通りである。

隣りも旅籠屋、その隣りも旅籠屋、一町内の半分が、汚い旅籠屋であった。

泊り賃が安いので、武蔵と伊織はそこへ泊った。この家にもあるが、何処の旅籠屋にも、馬舎が付きものになっていて人間の宿屋というより、馬の宿屋といったほうが近かった。

『お待さま、表の二階だと、少しは蠅はえが少のうございますで、部屋をお取替いたしますべ』

と、博労でない客の武蔵を、ここの旅籠では少し持ち扱い気味。

勿体ない、きのう迄の開墾小屋の生活から較べれば、ここはこれでも畳のうえ。——にも関らずつい、

(ひどい蠅だなあ)

と呟いたのが、気にも障さわったふうに、旅籠のかみさんの耳に這入ったものとみえる。

だが——好意のままに、武蔵と伊織は、表二階へ移った。こ

こは又、かんかんと西陽が映している。——すぐそう思うだけでも、気持が贅沢に変わっているのだと思ひながら、

『よしよし。ここがいい』

と、独り有めて落着いた。

ふしぎなのは人間をつつむ文化の雰囲気である。つい昨日までいた開墾小屋では、強い西陽は苗の育ちを思い、あしたの晴朗な気が卜されて、この上もない光明であり希望であった。汗の肌にたかる蠅は、土に働いている時は気にもならないし、むしろ、

（おまえも生きているか。おれも生きて働いているぞ）

といたい位、自然の中に生命を持つ友達にさえ思えるのに、大河を一つ越えて、この熾な勃興都市の一員となるとすぐ、

（西陽があつい。蠅がうるさい——）

などという神経と共に、

（なんぞ美味い物でも喰いたいなあ）

と、思う。

そういう人間の横着な変り方は、伊織の顔にもあり出てゐる。わりもない事には、すぐ横隣りで博労の一群れが、鍋に物を煮て、騒がしく酒を飲んでゐるのだ。法典の開墾小屋では、蕎麦を喰べたいと思えば、春先種子を蒔き、夏花を見て、秋の暮に実を乾し、漸く冬の夜粉を挽いて喰べるのだが、ここでは手一つ叩いて、打ってもらえば、一刻もすると、蕎麦が出てくる。

『伊織、蕎麦を喰おうか』

武蔵がいうと、

『うん』

と、伊織は唾をのんで欣しそうに頷く。

そこで旅籠のかみさんをよんで、蕎麦を打って貰えるかと計ると、他のお客からも御注文があるから、きょうは打って上げてもいいという。

蕎麦のできて来る間、西陽の窓に頬杖ついて、下の往来をながめていると、すぐ斜向うに、

御たましい研所

本阿弥門流厨子野耕介

と読める板が軒先に出ている。

それを先に見つけたのは、眼のはやい伊織で、さも驚いた顔しながら、

『先生、あそこに、御たましい研所と書いてあるけれど、何の商売でしょう？』

『本阿弥門流とあるから、刀の研師であろう。——刀は武士のたましいというから』

そう答えて、武蔵は、

『そうだ、わしの刀も、いちど手入れして置かねばなるまいな。後で、訊ねてみよう』

と、呟いた。

その時、襖隣りで、なにか喧嘩が始まった。いや喧嘩ではなく、賭博のもつれで、なにか紛争が起つたらしいのだ。——武蔵は、なかなか来ない蕎麦の待ち遠しさに、手枕をかって、とろとろしていたが、ふと眼をさまして、

『伊織。隣の衆へ、少しお静かにしてくださいと申せ』

といいつけた。

その境を開ければ、すぐ事は済むが、武蔵の横になっている姿が先に見えるので、伊織は、わざわざ廊下へ出て、隣の部屋へ、いいに行った。

『おじさん達、あんまり騒がないでくれよ。此方に、おらの先生が寝ているんだから』
すると、

『何?』

と、博労たちは、賭博の紛争に血ばしった眼を、一斉に伊織の小さい姿へ移した。

『なんだと、小僧』

伊織は、その無礼に、むっとして口を尖らしながら、

『蠅がうるさいから、二階へ越して来たら、又みんなが騒いでいて喧しくってしょうがないや』

『てめえがいうのか、てめえの主人でも、そういつて来いといったのか』

『先生がさ』

『いいつけたんだな』

『誰だって、うるさいよ』

『ようし、てめえっちのような、兎の糞みてえなチビに、挨拶しても仕方がねえ、後から、秩父の熊五郎が返答にゆくから引つ込んでろ』

秩父の熊か狼か分らないが、なにしろ獰猛そうなのが、その中に二、三人居る。

その手輩に睨まれて、伊織はあわてて帰って来た。武蔵は、

手枕の脇へ薄く眼をつぶって眠っている。その裾に西陽もだいぶ陰って、足の先と、襖の端の残り陽に、大きな蠅が真っ黒にたかっていた。

起してはいけないと思って、伊織はそのまま黙って、又往來を視ていた。——然し、隣の部屋の喧ましさは前と少しも変りはない。

こちらから持つて行つた抗議の衝動をうけて、賭博の紛争は沙汰止みになつたらしいが、その代り今度は団結して、無礼にも、境のふすまを細目に開けて覗いたり、暴言を放つたり、嘲笑つたりしているのだつた。

『ええこう、どこの牢人か知らねえが、江戸の真ん中へ風に吹かれて来やがって、しかも博労宿にのさばりながら、うるせえもねえもンじゃねえか。うるせえなあ、おれっちの持ち前だ』

『つまみ出しちまえ』

『わざと、ふてぶてしように、寝ていやがるぜ』

『侍なんぞに、驚くような骨の細い博労は、関東にや居ねえって事を、誰か、よく聞かして来いよ』

『いっただけじゃだめだ、裏へ抓み出して、馬の小便で顔を洗わせちまえ』

すると先刻の——秩父の熊とか鷹とかいう男が、

『まあ、待て。ひとりや二人の乾飯さむらい、騒ぐにや当らねえ。おれが懸合に行つて、謝り証文を取つて来るか、馬の小便で顔を洗わせるか、かたをつけてやるから汝たちは静かに呑みながら見物していろやい』

『おもしろえ』

と、博労たちは、襖の陰に鳴をせずめた。